

「協働」と「実験」を目指して



はじめに

標高1,400m、目の前には主峰赤岳をはじめとする八ヶ岳連峰、はるか南には秀麗な姿の富士山を望む清里高原は、森に渓谷、そして草原と、豊かな自然が広がっています。私たち公益財団法人キープ協会は、1984年から、ここ清里を拠点に、様々な環境教育事業を展開しています。

キープ協会は、アメリカ人のポール・ラッシュ博士(1897～1979)によって、1956年(昭和31年)に設立されました。キープ(KEEP)とは、「Kiyosato Educational Experiment Project(清里教育実験計画)」の頭文字です。ポール・ラッシュは、第二次世界大戦で疲弊した日本を再建をするためには、若い世代への教育と、自らの土地で豊かに暮らせるようになることが必要不可欠であると考えました。「信仰」「食糧」「保健」「青年への希望」という4つの理想(ビジョン)を掲げ、教会、宿泊研修所(現在の清泉寮)、農場、診療所、保育園など、様々な施設を建設し、戦後の農山村復興のモデルを目指しました。キープ協会のシンボルともいえる「清泉寮」は、現在宿泊施設として広く利用されていますが、建設当初は、キリスト教の青少年訓練キャンプとして使われていました。ポール・ラッシュは、キープ協会が、地域の人をはじめ様々な人が集い、語らい、学び合う、「教育」の場として機能することを考えていたのだと思います。

現在のキープ協会は、ポール・ラッシュの遺志を受け継ぎ、上記4つのビジョンに加えて、「国際協力」「環境教育」という新たなビジョンを掲げて活動しています。宿泊者向けの自然観察会などをきっかけにスタートした環境教育事

業でしたが、まだ「環境教育」という言葉も一般的ではない時代で、専従スタッフも一人でした。現在は専従職員が30名を越え、活動の対象や内容は多岐に渡っています。

「協働」と「実験」

現在の環境教育事業の柱としては、1) キープやまねミュージアムの運営管理、2) 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターの運営管理、3) 環境省日光国立公園「那須平成の森」「那須高原ビターセンター」の運営管理、4) 環境教育プログラムの提供(キープ・フォレスター・スクール／主催・受託事業)などがあります。主催事業は年間約30件、受託事業は、企業や行政、学校団体など年間250件を実施しています。近年は特に、企業の社会貢献(CSR)事業における環境活動に協力をする機会が増えています。

私たちの主催事業の考え方を一言で表すならば、「協働」と「実験」という言葉に集約されます。1985年にスタートした「清里エコロジーキャンプ」は、最もそれを具現化した事業といえます。

「清里エコロジーキャンプ」は、人と自然との関わり合い方を様々な切り口から学ぶ、というコンセプトで始められた、大人対象の宿泊型環境教育プログラムです。毎回その分野に詳しいゲストをお招きし、その都度異なるテーマに挑み、環境教育の開発と普及を目指す場になっています。近年では、「神社(日本人古来の自然観を見つめ直す／ゲスト:神職)」「ネイチャーテクノロジー(自然や生き物の機能に学び、未来のライフスタイルを考える／ゲスト:

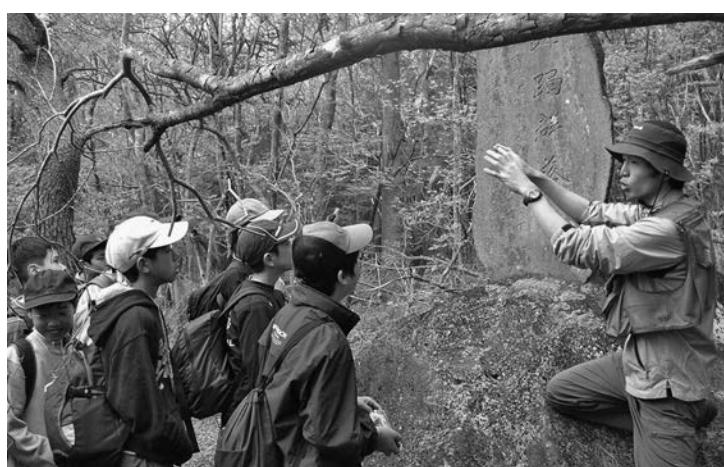


毎年多種多様なプログラムが展開される。写真は自然体験プログラムの一コマ

大学教授)」「いのち(五感で自然を感じて、自分の命を見つめ直す/ゲスト:セラピスト)」などをテーマに掲げ、実績は70回以上を数えています。ゲストとの、参加者との、そして清里の自然との化学反応によって生まれる時間は、まさに「実験室」。このプログラムで大事にしているのは、「共に学び合う」こと。効果的な学びを考える上で、一方的な情報提供よりも、参加者自らが主体的に学ぶことが大事なのでは、と気づかせてくれたプログラムでもありました。

「インタープリター」の普及

環境教育の普及には、環境教育の指導者を養成する必要も感じていました。私たちが宿泊型の環境教育プログラムをはじめたのも、1985年には「レンジャー・トレーニング・キャンプ」という指導者養成プログラムからでした。これを前身に、1992年からは「清里インターパリターズキャンプ」と名称を変更し、現在に至っています。「清里インターパリターズキャンプ」は、インターパリター(=自然



インターパリターは、目に見えない自然のメッセージを伝える
“人と自然の橋渡し役”

と人との橋渡し役、自然案内人)の役割や手法(=インターパリテーション)について実習を中心いて学ぶ、2泊3日のプログラムです。インターパリターに関心を持ち始めた方から、プロとして現場で活躍している方まで、それぞれのニーズにこたえる形で、現在は、「入門編」、特に教育関係者向けの「体験学習法編」、施設展示や企画など特定の分野に特化した「専科編」などを展開しています。

私たちの考える「インターパリター」は特別な技術や資格を有する人ではありません。日常的に自然と人とをつなぐ人が増えることが、豊かな人間関係や社会を作ることに寄与できるのではないかと考えるからです。「インターパリター」が促す様々な自然体験を通して、その人の新たな扉が開かれる。そんな瞬間が、日常のあらゆる場面で生まれることを願ってやみません。

30周年を迎えて

2013年、キープ協会の環境教育事業がスタートして30年を迎えます。現在、これまでご支援いただいた方々に感謝すると共に、今までの成果とこれからのビジョンを発信すべく、30周年を記念した様々な事業を計画しています。この度、キープ協会が、環境教育等促進法の「体験の機会の場」の認定を受けたことは、これから活動を後押ししていただけるものだと思っています。

キープ協会の活動の指針として、「異なるものをつなぐ」という言葉があります。設立者ポール・ラッシュの遺業はまさに「異なるものをつなぐ」ものでした。私たちが目指すことも、やはり「異なるものをつなぐ」ことにあると考えています。キープ協会が環境教育を通して、地域の、日本の、世界の「つなぎ」役となり、自然と人との出会いの場を創造していくことが、今の私たちの思いです。

執筆者のプロフィール

関根 健吾(せきね けんご)

公益財団法人キープ協会環境教育事業部(キープ・フォレスター・スクール)主任。(公社)日本環境教育フォーラム主催「自然学校指導者養成講座」を受講後、2005年より現職。地域小学生対象の自然体験活動から、環境教育指導者養成、海外での指導など、幅広く環境教育・国際協力に携わる。森林インストラクター。